

HEADACHE - HEADACHE

《後編》

諧謔鳥

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百五十と九。過去の夢がいい夢だったと思えるなんて、オレも随分と幸せになったもんだ。お陰で随分と寝覚めがいい。迷いも眠気も、吹っ切れたような気がする。独断と偏見法第三百五十一と一条【大抵のことは寝れば治る】。

「さあ、《開閉魔》狩りに出かけるぜ」

寝ぼけまなこの三人を叩き起こして、朝霧の立ちこめる似非倫敦の街に飛び出した。

「作戦は歩きながら説明する。遅れたら承知しないからな」

「ちよ、お頭っ！ 一体何処へ行くんですかい」ホスゲンは慌ててコートを羽織る。

「うー、まだ眠いよう」シェリは寝ぼけ眼をこすりながらとぼとぼとついてくる。

「待つロボ、まだ頭を装着してないロボ」と部屋の中に取り残されたイペリットの頭が叫ぶのが聴こえる。

「知るかつ！ 『こちら亀有』 っって言うだろ」

「オカシラ、それを言うなら『時は金なり』ロボ」

「むしろ『カメラリ』ってなんですかい？ というかイペリットお前さんよく分かったな」

「あはは、エイクも寝ぼけてるんじゃないのー？」
「るせえ」

大声で即興ドタバタコントを繰り広げながら似非フリート街の路地裏を歩いていくと、早朝にも関わらずあちこちの窓がガラと開いてガラの悪い顔が覗く。

「エイクの兄貴、お久しぶりですっ」

「水臭えじゃねえか、出所するなら俺たちにも一言くれれば、総出で迎えに行つたつてのによ」

理由はよく分からないが、オレは随分この似非フリート街のゴロツキどもに随分慕われている。散々殴つて蹴つて捻つて折つてやつた奴らばかりだというのに。つまりマゾばつかか、ここは。昨日のメシもあらかたこいつらが用意してくれたようだ。それなのに昨晩隠れ家に顔を出さなかつたのは、いくらか遠慮してくれたんだろう。久々の「一家」水入らずに。

「お前らの出迎えなんているかよ。出て来ていきなりお前らの不景気なツラがずらつと並んでちゃ、久々のシャバの空気が不味くなるぜ」

オレが奴らの期待通りに答えてやると、はは、やつぱりエイクの兄貴はこうでなくちゃな、と豪快に笑う。殺人鬼だった頃のオレには、熱狂的なファンがわんさか居た。それもオレの血を飲めば強くなれるとか、《ヘッドエイク》の正体はホンモノの悪魔で、正当な手続きを踏めば契約できるとか、そんな馬鹿げたことを本気で信じてる頭のネジが吹っ飛んだ奴らばかりだった。殺人鬼をや

めたとき、そんな奴らはオレを呪い、オレの名に唾を吐いた。そしてオレのことを尊敬するやつなんて、誰ひとりとして居なくなつた。

「ずっと、そのままだと思つただけだな。」

誰かに好いて欲しいと思つたことなんてない。好かれるだけの人間だとも思わない。そもそもオレは世界そのものに嫌われている人間なのだ。そんなオレを、なんで慕うんだ？お前だつて世界の一部だろう、と問うてみたことがある。頬に傷のある男は言つた。「俺たちは世界のはみ出しものだからね、世界があんたのことをどう思おうが、そんな関係ねーんですよ。俺たちは俺たちの独断と偏見に従つて、殺人鬼じゃないあんたが好きなんです」と。そのコトバの真偽を心臓ハートに問うのは簡単だ。だがオレはそうしない。たとえ嘘でもいい、そのコトバをたつた一度だけのものにしたいくなかつたのだ。

「ありがとな」オレは誰にもなく言つた。奴らはそれをちゃんと無視してくれる。分かつてるじゃねえか。

「なあ、お前ら、《開閉魔》^①って知つてるか」

「《チャック・ザ・ジッパー》^②のことでしょうか？もちろん知つてますとも、有名ですかんね」

「居場所は？」

「さあ、それは流石に……」

他の連中も、首を横に振る。

「俺、知り合いの情報屋に当たつてみようか」

「そうしてくれると助かる」

「兄貴たちは何処へ向かうんで？」

「サルファの店だよ」

「サルファの店……つて、仕立て屋ですか。そんなところに何の用事です」

「今回はちつと派手な喧嘩になりそうだからな。こんな襪襪履履じゃ踊れねえだろ」

ゴロツキのひとりがひゆう、と口笛を吹く。

「久々にアニキの喧嘩、こいつあ観に行かなきゃ損だぜ。巻き込まれんのは死んでもごめんだけだな！」

「違いねえ、とあちこちで笑いが起こる。」

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百六十。

「絶対来んなよ」オレは居並ぶ連中に順々に指を突きつけて言う。「足手まといだ」

「アニキ、シェリに怪我させちゃいけないぜ」

「おいおい、オレの心配はナシかよ」

「心配するだけ無駄つてもんでしよう」

「まあな、お前らは今晚のメシの心配でもしてるよ。帰つたらこのオレが片っ端から喰らいにいぐぜ。ちよつとでも不足してみろ、お前らのお気楽な脳みそに齧りついてやる」

「じゃあな、と手を振ると、オレたちは表通りの人ごみに身を滑り込ませた。」

「きやああつ！エイクちゃん久しぶりーっ！何何、何な

の、今日はどんな御用なの！」

オレを見るなりシエリ並のハイテンションで黄色い声をあげたこのオカマが、仕立て屋のサルファだ。ピンクに染めたおかつば頭に、蛍光色の男物だか女物だかよく分からない前衛的なデザインの服がこのうえなく目と精神に悪い。毎度のことだが、ここを訪れるたびオレたちは四人揃ってげんなりする。せつかくの爽やかな朝が台無しだ。サルファは今も殺人鬼時代も変わらず付き合っている数少ない人間のひとり、オレのための服も殺人鬼のための服も好き好んで作ってきた、モラルのイカれた一種の変態だ。とうかまごうことなき変態だ。このごつい指輪まみれのセンスの欠片も無い指先から、幾多の犠牲者を騙して来た戦闘服が生まれたとはどうも信じがたい。

「だって男の子の服でも女の子の服でも、どっち着せてもサマになる実験台なんてエイクちゃんの他に居ないもの。ずつとゴブサタだったからアタシ寂しかったんだから！」

おかしら、おいらもう帰りたいですとホスゲンが小声でぼやく。イペリットはといえば雑然とした店内に立ち並ぶマネキンにまぎれて完全に存在感を消していた。

「シエリちゃんもすっかり食べごろ美少年に育っちゃって：じゅるる」サルファは下品な音を立てて舌なめずり

をする。「ねえねえ、エイクちゃん。ものは相談なんだけど、今日はお代、お金の代わりにシエリちゃん置いてかない？明日の朝には返すから」

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百七十と五。

「殴るぞ」

「：せ、せめて殴ってから言ってくれない？蹴ってから言うのは反則よ」サルファはショーウィンドウにべつたりと全身を貼付けて喚いた。オレが怒るといつもは止めに入るシエリが、黙ってこちらを遠巻きにしている。嫌いだ、と口に出しては言わないし、そんな感情もないはずなのだが、シエリは確実にサルファを避けている。

「まったく：冗談に決まってるじゃないの。だいたいアタシがエイクちゃんからお代なんて取ったことがある？エイクちゃんのためならいつでも無料でやってあげる、って言ってるじゃない。あんたの服を作るのは、アタシの喜びなんだから」

そう言つてサルファは宝石をはめた指をせわしなく絡ませる。

「それで、今日のエイクちゃんは男の子、女の子、どつちなの？」

「『女』で頼む。ちよつと釣りたい奴がいるんでね。：それと悪いが、できれば半日以内に仕上げてもらいたい。今日中に終わらせちまいたいからな。あまりゆっくりしていると人死に出る。無理か？」

「あら、人命を気にするなんてエイクちゃんも偉くなつ

たものね。半日？…無理なわけじゃない。アタシをナメないでちょうだい。でも、それだとあんまりデザインには凝れないわね…」

「デザインなんてどうでもいいだろ。どうせ一回で壊しちゃうんだから」

「一回限りだからコダワるの！まったくエイクちゃんたら分かってないんだから。アタシの服はエイジュツ。エイジュツには一回性が大切なのよ。アタシの服はエイクちゃんと一緒に紅く染まって、花火のように美しく散るの…」

サルファは頬に手を当ててはあ、と溜め息を吐く。

「てめえのゲイ術なんて知るか。《開閉魔》が釣れて、動きやすけりやそれでいいんだよ」

「まあいいわ。エイクちゃんにアートを解する心なんて期待してないもの。そうよ、キャンパスが自分の絵に口出してきたら、絵描きは仕事にならないわね。表現するのはアタシの仕事。エイクちゃんは黙って描かれてればいいのよ。そうと決まったらエイクちゃん。さつさと寸法を測らせなさい。シェリちゃんもよ。そんな所に居ないで早くこつちへ来なさいよ。何よその服、つんつるてんじやない。そんなダサい格好して、アタシに見逃してもらえないなんて夢にも思わないことね。ぐふふ、シェリちゃんの服作るのは初めてだからテンション上がっちゃうわー！何を着せようかしら。この子も何着せても似合いうさだから…。いつそのことエイクちゃんとおそろ、

ても悪くないわね」

サルファは逃げ出そうとするシェリを捕まえて、カーテンの向こうに連れて行こうとする。エイクたすけてー、と悲鳴をあげているが、オレは助けてやらない。お前は知らないだろうが、オレたちの財布は恒常的にピンチだ。独断と偏見法第六百九十と三条【貰えるものは、貰つとけ】。ちよつとだけ我慢してろ。

「けどよサルファ、ふたり分なんて夕方までに仕上がりかよ」

「余裕！アタシにかかっちゃ、ひとり分がふたり分になるのが大した問題じゃないわ。シェリちゃんのに使った分だけ、エイクちゃんの服の布地を減らせばいいだけのハナシだもの！」

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百七十七と六。頭が殴るぞ」

「だ、だからせめて殴つてちょうだい！」
布切れの山の中に蹴転がされながら、サルファは叫んだ。

「あ、シェリちゃん待つて！」

倒れたサルファの手をすり抜けて、シェリが逃げ出そうとしていた。しかし床にまで散乱した布地に足をとられ、数歩も行かないうちにずっこける。サルファがその足を掴んで、そのままカーテンの奥へ引きずって行つた。カーテンの向こうからは暫く巻き尺を当てられてくすぐったがるシェリの声が聴こえていたが、ふいにサルファ

アが「ぎゃあ」とおかしな叫び声をあげた。

「おい、どうした」

「え、ええええええイクちゃん」カーテンの後ろからサルファの青ざめた顔が覗く。「ど、どうしてシエリちゃんの背中にチャックがついてるの？」

「……！」

オレは散らかった店内を仕切るカーテンを乱暴に開け放った。

露出したシエリの背中には、牢獄で見たものと同じ、きつちりと噛み合った金属の歯が斜めに並んでいた。

「お前それ……いつから！」オレは混乱した頭で叫ぶ。

「んー。ずっと前からこんな感じだよー。もう身体の一部、つて感じ？」シエリはきやはは、と笑う。

「笑い事じゃねえだろうが……」

「これって、お頭が言っていた例の《開閉魔》のしるし、ですかい？」

「そうだよ。お前、一緒にいて何故気づかなかった！」

「イペリットは知ってたロボ」

「早く言えよ！心当たりがあるなら普通、説明したときに気づくだろうが」

「だってこれ、何年も前からあったロボ。まさかお頭が言ってるのと同じだとは。イペリットだつてこう、だし」そう言つてイペリットは自分の胸のハッチを開けたり閉めたりしてみせる。「別に変だと思つたことないロボ」

「お前は特別なんだよっ！」

はあ、と溜め息が漏れる。オレは頭を抱えた。頭痛が痛い。四百九十九万六千八百七十と七。

《開閉魔》はマーキングした相手を数日以内には必ず殺している。イペリットの言う通りこのしるしは数年前からあるものだとしたら、一体《開閉魔》はどういうつもりなんだ。そもそもシエリは奴のターゲットからは外れているはずだろ。例外は現場を目撃した爺さんだけ。その爺さんだつて、その場で殺されている。マーキングしながら、シエリがまだ生かされている意味は何だ？《開閉魔》は何の目的があつてそんなことをする？まさか単にマーキングしたことを忘れた、というわけでもねえだろう。奴がオレの摸倣犯だとするなら、この行動、この

例外は全く意味不明だ。

「お頭、どうするんです？」

「どうするもこうするも」

数年間放置していたターゲットを、《開閉魔》が今日明日にでも狩りに来ることは無いだろう。だがその可能性はゼロじゃない。

「狩られる前に、狩るだけだ」

偉髭の奴には「討伐してやる」と言つたが、オレは《開閉魔》を殺すつもりはない。百二十と九番目はシエリのための特別な番号、単なる数字じゃない、永久欠番だ。こんなクソ野郎のために譲つてやるつもりはない。その

かわり、奴には後悔してもらう。オレから奪ったこと、オレの大切なものにツバをつけやがったこと、オレの猿真似なんざ始めやがったこと、生まれてきたことそのものを、死ぬほど後悔させてやる。後悔処刑、つてやつだ。その後で《開閉魔》を似非倫敦市警に引き渡すか否か。オレが似非倫敦塔に戻るとしたら、奴はオレの同居人になるわけだからな。面接試験の結果次第だ。

「お頭、」色とりどりの布地の山に腰掛けて、哲学者のポーズでウニと対話していると、ホスゲンがおずおずと耳打ちする。「《開閉魔》を探さなくていいんですかい」

言外に早くここを出たいと言っているのは明らかだ。「いいんだよ。奴が動くとしたら夜だ。それまではどうせねぐらで丸くなってるんだろう。今晚のシゴトの想像を膨らませて涎を垂らしながらな。ねぐらを探すのは無駄だぜ。簡単に見つかるような場所なら似非倫敦市警が掴んでいるはずだ。探しものだけが奴らの取り柄だからな。いずれにせよ、《開閉魔》がねぐらに選んでいる場所は間違いない奴のホームグラウンドだろう。そこでやり合ってもヒヤクガイあつてイチリなし、つてやつだ」

「まるで《開閉魔》をよく知ってるような口ぶりでですね」
「警視
偉髭から聞いた限りじゃ、奴はオレの手法に自分なりのアレンジを加えてシゴトをしているみたいだからな。あらかたの予想はつく。次の犯行場所もな」

シエリのことといい、爺さんのことといい、やり方には多少のズレがある。だが《開閉魔》がシゴトをしてきた場所、そしてその順番は完全にオレをなぞっていた。最初の犯行、かつてシエリの隣家の父親が死んだのと同じ場所で殺されたのは、息子の失踪の後精神を病んだ母親だった。これでシエリの友人一家は全滅したことになる。間接的な影響を含めれば、その一家は丸ごと全部オレに奪われたのだ。その結果オレの手元に残ったものもきたら「何も無い」。そう、何も残らないことと、「何も無い」が残ることでは全く意味が違う。そもそも不在と、穿たれた空虚では。後味の悪いハナシだ。頭痛が痛い。四百九十九万六千八百七十七と八。

「奴は今晚ユースド・ストリート中に現れる。それは間違いない。無駄に歩き回つても頭痛が痛いだけさ」

「じゃあ、」
「出来上がるまでここで待つ」
ホスゲンは嘆息して肩を落とした。

霞の向こうで東の空がぼんやりと赤く染まっているのが見える。陽が沈みきる前に、サルファは仕事を終えた。似非倫敦の太陽は東から昇り、東に沈む。地球が太陽の周りを公転している事実は一世紀も前に明らかとなったというのに、綻びた虚構げんじつは一向に好転しない。そんな狂

つた方向感覚ヒガシニ東西ズム。

「目ん玉かつぽじてよおく見なさい！アタシの芸術をば！エイクちゃん大変身さすがアタシ！の巻なんだから！きやあ、アタシつてば天才！」流石に幾分憔悴した様子のサルファは、しかしハイテンションでカーテンを開ける。

「誰ですか！」

カーテンの後ろから現れたオレに向かって浴びせられた第一声だった。オレはホスゲンの頭上にげんこつを振らせて、オレが誰だか思い出させてやる。他の記憶は幾つか消えたかもしれないが。

「新規の人物を認識したロボ。人名と分類タグの入力が必要ロボ」

それもグーで代用する。独断と偏見法第七百三十と八条【壊れた機械は叩けば直る】。こーゆーのにはチョッカ
ンテキなソウサが大事なんだよ。

「わーい、エイクがおねえちゃんだー。おねーちゃんのエイク久しぶりー」

くるんくるんに巻き放題だった髪は梳られ、サイズの合ったこぎれいな服に身を包んだシエリはまるでどこかの貴族の息子のようだった。「コンセプトは『男装の麗人』よっ！」とはサルファの談だが、裏の裏は回り回って結局表、見た目に齟齬がなければ赦すことにする。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十と二。

女の格好をするのも、化粧をするのも久しぶりだ。ホスゲンとイペリットをどついた手前口に出しては言えないが、鏡に映る姿がまるで自分ではないようで違和感を覚える。何処が、とはつきり分らないが、鏡の中のオレは何かがおかしい。どこか歪で、まるでキグルミを被っているような。オレは自分の背中にジツパーがついてはいやしないかと探してみる。当然そんなものは存在しなかった。サルファの作った服は美しい。だがそれを着込んだオレは、いつにも増して醜く見えた。

エイク、あなたはだめな子よ。

私がこんなに心配してるのに。どうしてそれが分からないの。

おしとやかな優しい子になって欲しいのに。

あなたなんて女の子じゃないわ。

人の痛みが分からない、だめな子よ。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百十と三。早くこの醜い皮を脱いでしまいたい。忌まわしい記憶を、心の奥にしまいたい。

はあ、と溜め息を漏らすと、シエリが近寄って来て、満面の笑みをオレの顔にずっと近づける。

「な、なんだよ」

「エイク、せつかく綺麗なんだから笑わないとだめだよー？」だめだめだよ、とシエリは満面の笑みから更に笑みを広げる。お前はチエシヤ猫か何かか。だが、こいつに言われる「だめ」はそれほど嫌いじゃない。

「ほら、笑って！はい、ちゝず」

このやるゝ、人が弱つてると思つておちよくりやがつて。

「ちいよいよつずつ！」

「チーズ」の「いゝ」のところで、思いつきり歯を食いしばつて言つてやる。

「あはは、エイク変な顔ー」超変な顔、とシエリは笑い転げる。

そんな姿を見ていると、ムキになつた自分が馬鹿馬鹿しくなつてくる。気づいたら、ふ、と笑いが漏れていた。

ぱりん、と薄いガラスが割れるような音がして、閃光がオレたちの間を駆け抜けた。光を感じた方を見ると、サルファが大きなカメラを持ってしたり顔で立っていた。

「やったわ！天下の《ヘッドエイク》の貴重なスマイルを撮つてやったわよ！ウチの店の看板写真にしてやるんだからつ」

気づいた時には手が勝手に動き、スカートの中に仕込まれた《固定観念》ステレオタイプを抜き放つて、サルファの持つカメラに振るつていた。

「ぎやあああつ！」

サルファは素つ頓狂な声を上げてすんでのところでまつぶたつを免れたカメラを放り投げた。カメラは床に溜まつた布地の上に不時着する。

「な、ななななにするのよエイクちゃん！無いわ！抜

き身は無いわ！あんまりよ！」

「るせえ、オレのもんを『と』る奴は赦さねえ、つて言つてるだろうが！」

「いいじゃないのよ：減るもんじゃないんだし」

「減るよ」

「何が」すぐさまサルファに切り返されてオレはう、と詰まる。

「ほら、言うだろ、写真に映るとた、魂が……」

「オカシラが迷信を信じてるロボ意外ロボ」

「ち、違うつ！ほら、アレだ。犯罪者が顔写真を残すなんてのは命取りなんだぜ。これを元にアシがついたりなんだりするの」とオレは地にアシのつかないふわわした言い訳をする。

「だいじよーぶよ、あんたがエイクちゃんだなんて誰にも分かりやしないわ。服もメイクもそう作つたんだから。あんたの望み通りにね」

「ほんとか……？」

「……あんた」サルファが急に神妙な顔つきになつて言う。「やめた方がいいわよ。あんたそうやって不安げな顔すると本気で可愛いから」

オレは慌てて眉根を寄せ、ばん、と両手で頬を叩いた。サルファが黙つてニヤニヤしている。やめろつ、オレがちよつと留守にしている間に余計な笑い方覚えやがつて。

「ねー、サルファ」シエリが珍しく自分からサルファに声をかける。「さっきの写真、現像できたらボクにもちよ

「だいたい？エイクがこんなだから、ツーショットの写真なんて一枚もないんだもん」

「でもそんなことしたらエイクちゃんに殺されちゃう……」オレの射るような視線に肩をすくませながら、サルファはおどおどと言う。

「お願いっ！今度お仕事手伝うからー。いいでしょ？」

とキラキラまなこで詰め寄られ、サルファはあつさりど陥落する。オレに対する恐怖はシエリによつてあつさり打ち破られた。なんだか弟に身長を追い抜かれた姉の気分だ。嬉しいやら腹が立つやら。腹が立つやらはらわたが煮えくり返るやら。モツ鍋か。

オレは時々疑いたくなる。シエリには本当に悪意がないのだろうか。

「なあ、ホスゲン、イペリット。『盗賊が板についてきた』つてこういうことかよ？」

お前らがいらんこと教えたんだらう。

「だつてお頭、『怒り』の無いシエリに強請り方を教えたつてしようがないでしょう」

「だから代わりに、強請り方を教えたロボ」

「実際、おいら達がドスキかせるよりも」

「そっちのがよっぽど儲るロボ」

いいかお前ら、世の中ではそれを「盗賊」じゃなく「ジゴロ」と言う。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百四十と四。オレが

いない間、どうやって食いつないでいたのか不思議に思つていたが……。

「ちゃんと『お願い』して貰つてるんだから、いいことだよなー？」と言うシエリの表情は、似非倫敦の大多数の人間が忘れてしまった純朴さに満ちあふれていて、なんだか矛盾を感じる。働いて金を稼ぐほうが、本来美德のはずなんだが。まあ、「美德」なんてオレたち悪党にとつちやあくまで「美德的なもの」に過ぎない。

がぼろちよーん

げぼろよーん

びぼろごーん

ごぼろどーん

シューウインドウを揺らす大音響で、調子つばずれな鐘の音が鳴り響いた。似非倫敦の中心にそびえ立つ大時計は毎日午後五時四十三分二十と一秒びつたりに鐘を鳴らす。午後五時四十三分二十と一秒びつたり、だ。街中にくまなく汚い音を響かせる茶色の大時計を、オレたち似非倫敦市民は親しみを込めて《大使》と呼んでいる。

この音を聴く度に頭痛は痛む。あんなにデカくて立派な金属の塊から、一体どうすればこんな貧乏臭くて惨めな音が出せるのか答えられる奴がいるのなら訊いてみたいものだ。きつと大時計の音がこんなに酷いのも、この街が抱える「綻び」のせいなのだろう。きつとホンモノの

倫敦のホンモノの大時計は、《大便》^{ビッド・ベン}などと呼ばれることも無く、その姿に見合う荘厳な鐘の音を聴かせてくれるに違いない。

似非倫敦に汚い鐘の音が鳴り響くと、灰色は終わり黒になる。夜が、やってくる。夜はシゴトの時間だ。《開閉魔》にとつても、オレにとつても。

「さあ、フアッションショーの時間は終わりで。ユースド・ストリート中古通りに向かうぜ」

「ユースド・ストリート」はその名の通り、使い古された街だ。建物も、商品も、人間でさえ、新品のものは何一つだって存在しない。かつてオレもここで五十と五番目のシゴトをした。その殺人だつて、ここで起こった最初の殺人じゃない。そもそもこの場所に「初めて」など存在しないのだ。中古通りは、この世界が生まれたその瞬間から中古だった。新品の時代を知らず、これ以上古びることもない。それは止まった街だった。たとえ街が止まろうとも、人の流れは止まらない。ど

んな人間も、脳みそがほんの一瞬電気信号の伝達をサボタージュするだけで全てを失う。一時の停滞から人間が再起動することは二度とない。そもそも生きるとは、動き続けることだ。その意味で、中古通りは死んだ街と言つても過言ではない。

誰もガスを補充したことのないガス灯が、行き交う人々の頭を、肩を、煌々と照らしている。石畳に刻まれた深い轍を通つて、一台の幌付き馬車が手前から奥へ走り去つて行く。そして数瞬のうちに、奥から手前へとその同じ轍を通つて別の二頭立てが走つて行く。二台の馬車がすれ違った瞬間を見た人間は、どこにもいない。

オレは単独で人通りの中に紛れ込んでいた。ホスゲンとイペリットはシェリに張り付いてオレの少し後ろから追跡しているはずだ。

《開閉魔》はオレの犯行場所と番号を一致させて殺人を行つている。つまりエリー嬢がこのここに出向かない限りは、今晚ここで殺されるのがあのズレた娘になる可能性は無い。エリー嬢の行動範囲とオレのかつての犯行場所がカブるのは、もう少し数字がこんでからだ。「ジッパー付き」が判明している残りの女たちについても、ここへ近づかないように既に偉髭に手を打たせている。奴がここでシゴトをするとすれば、ここで獲物を拾うしかない。そこでオレが存分に目立ってやるわけだ。サルファ特製の威力に期待だ。

《開閉魔》が、既にマーキングされているシェリの方

に食いつく可能性もある。大動脈の真上を走るジツパーを開けられれば、シェリは即死だろう。その危険を考えれば、連れてくるべきではなかった。だがあいつが何よりも仲間はずれを嫌うことはオレが一番良く知っている。それにホスゲンとイペリットは右目の件の雪辱を果たしたがっていた。今回の一件でシェリを守りきることができれば、奴らの自信にも繋がるだろう。だからオレは敢えて三人にオレの背中を守る役割を果たしてもらおうことにした。万一後ろで何かが起こっても、オレならば察知することができる。長年お尋ね者として暮らしていると、目に見える正面の事象よりも、背後で起こる目に見えない気配の方が、よほど敏感に感じ取れるようになるのだ。頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十二。

《開閉魔》がどんな姿をしているのかオレは知らない。偉髭に発見の目印を聞いてみたが、悔しそうに首を横に振るだけだった。襲撃は、常に背後から行われる。第一撃も、第二撃も。何度振り返ろうと関係なく、攻撃は常に背後から行われる。似非倫敦市警は一度として《開閉魔》の姿をしつかりと視認したことはなかった。分かるのは、奴らをおちよくるように聴こえる若い男のような声だけ。幽霊みたいな奴だ。幽霊ならアシがつかないのも当然……って、このネタは二度目か。ウニがあくびして

るぜ。
背後の脅威を散々に聞かされたオレは素敵の感覚を後方に絞り、シェリたちに後方から視覚でもアシストして

もらっている。万全の体勢だ。独断と偏見法第二百六十と五条【参考にするなら勝者の助言より敗者の体験談】これは法というよりいづらか教訓じみているが。

後方に注意しているからといって、前方に対して注意力散漫ということではない。少なくとも注意力三万程度は前方にも注意を払っているつもりだ。ちなみにオレの注意力全体を測ろうとすれば、スカウターがぶつ壊れちゃうだろうぜ。「スカウター」が何かは知らないけどな。

前方に向けたアンテナに引つかかるのは、今のところ通り過ぎる人々の好奇の視線だけ。サルファは今日も、オレのみてくれを客観的にも十分「魅力的」にプロデュースしてくれたらしい。

前方に向けた威圧感を控えめにしていられるだろうか。明らかに一般人と分かる隙だらけの男が幾度か、オレに声をかけそうなそぶりを見せた。オレはその度にちよつとだけ殺気を外に出してやる。すると男は原因不明の悪寒に襲われてすこすこ退散した。

そしてまた、顎髭を綺麗に刈り込んだ伊達男がオレに視線を合わせてくる。そいつを追っ払うために、僅かに前方に注意を向けた時だった。聴覚に僅かなノイズがかかる。

左後方からぬつと伸びてきた腕を、オレはとっさに掴んだ。「腕」が持っていた白い布から、鼻を突く刺激臭が漂う。

やり方を変えたのか？相手を見やがって。スマートじ

やねえな。

掴んだ手を支点に身体を半回転させる。後ろには《開閉魔》がいるはずだった。

一瞬の驚きに緩んだ手から、《開閉魔》の腕がすり抜け、空中に僅かに開いた隙間にすると滑り込んだ。空間にできた裂け目の縁には、シエリやエリー嬢の背中にあったものと同じ金属の歯が並んでいた。ただし、こちらは開いている。じいっ、と聞き慣れた音を立てて、裂け目が閉じていった。

急に振り返ったオレに、遠くでシエリたちが怪訝そうにしている。オレは目で「大丈夫だ」と合図を送った。どうやら第二撃が来る様子もない。

《開閉魔》の背後攻撃の正体はこれか。奴は空間にもジッパーを作ることができるのだ。なるほど、世界の「外側」に逃げられてしまえば、似非倫敦警察も追いかけることがない。

追撃こそしてこないが、諦めたわけではないだろう。どうやらオレはしっかりとターゲットにされたようだから。背中に手を伸ばすと、固い感触が触れる。最初の接触はオレが一本取った気でしたが、どうやら考えが甘かったらしい。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十三と三。

次に気づかなかつたら、アウトだ。だがヒントはある。音だ。思い返せば、接触する直前にもジッパーが開くときのあの音が聞こえていた。次は警戒を聴覚に集中すればいい。

ばいばい。

じいっ！

来た。オレはやはり左後方に出現した裂け目の中に正拳を突き入れる。どすっ、という肉を殴りつけたときの独特の手応えがある。だがこれは入っていない。腕か何かで防御された。人ごみの中で派手な動きはできない。ガードされれば、殆どダメージは期待できないだろう。オレはすぐさま手を引くため。向こうがどうなっているかは分からないが、間違いなく奴のホームグラウンドだ。のんきに手を突っ込んでいたら切り落とされかねない。一撃加えると、その裂け目はすぐに閉まっていた。

じいっ！

さっきの裂け目が閉じきらないうちに、再び音が聴こえる。殴って潰す。何度かそれを繰り返すと、ジッパーは沈黙した。

オレが戦闘に入ったと見た後方部隊が近寄ってこようとするが、オレは来るな、と合図する。多分あいつらは、《開閉魔》の攻撃を察知できない。こちらが主導権を握れない今、多人数で攻めるメリットより人質を取られるリスクの方が大きい。

じいばい。

耳元で、ゆっくりとジッパーが開く音がする。攻撃の意思が感じられない。この膠着状態を抜け出すため、奴の方から誘い出しにかかったか。

「あんた、何者？」

聴こえる声は偉髭が言った通りの、若い、男の声だ。聞き覚えはない。

「あなたこそ、わたしに付きまとわなだけでいただけます？」

必要かどうかはさておき、オレはとりあえず猫をかぶっておく。奴がオレを《ヘッドエイク》だと認識せずに異にかかったとすれば、そちらの方が都合だ。懐に飛び込むその瞬間までは、自分が優位に立っていると相手に思い込ませた方が得だから。

「そーゆーワケにはいかなんだよね。俺、あんたをZongに決めたんだからさあ」困るんだよね、と男の声は言う。

「あなた、《開閉魔》でしょう？」

「できれば《チャック・ザ・ジッパー》って呼んで欲しいな。だってそっちの方が笑えるでしょ、ね、綺麗なオネエサン」

「残念ね。わたし、^{ビエロ}道化は嫌いな」

「俺は好きだけだなあ。強い女のヒト」

「また殴られたい？」

そう尋ねると、裂け目の向こうでくつくつと笑う声がかえりこえる。

「いいなあ。あんたいいよ。あんたみたいな獲物を求めてたんだ。《ヘッドエイク》に会えるまでの暇潰しとして

は、あんた最高だよ」

「何処にいるの？」

「ここにいるよ、あんたの傍に」

「この距離で満足？」

「もつと近づかせてくれるのかい？」

「あなたが姿を見せてくれるなら」

くくく、というくぐもった笑い声が、やがて哄笑に変わった。

「俺を釣ろうつてののか？ いいよ、釣られてあげる。：次の角を、左に折れな」

耳元からの支持に従って、路地裏へと折れる。人ごみに紛れ、オレが中古通りから消えたことに気づくものはない。オレだけを注視していたシエリたちを除けば。しかし続いて聴こえてきた、「次を右だ」という支持によって、オレは三人の追跡から隔離された。正しい道を辿ってくれることを祈るしかない。右。右。左。右。と、オレはどんどん狭い小路へと誘導されていく。次第に、声の指示を受けなくても次に曲がる方向が分かるようになった。奴はオレを、《ヘッドエイク》の五十と五番目の犯行場所に誘導しようとしている。オレはその場所を頭に思い描く。まるで建物が丸ごとひとつぼっかり消えてしまったような、都市のど真ん中に開いた穴。真つ平らな空き地。暴れるにはちょうどいい。向こうもそう考えているのだろう。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十一と四。

やがて目の前に、脳裏に描いた風景と同じ空き地が現れる。しかしそこには誰もいない。空っぽ。圧倒的に空っぽだ。

「あなたは何処？」

そう問いかけると、耳元の声が笑う。

「そう焦らないでよ。ちゃんと遊んであげるからさ。いつもは最初に会った時からいくらか日をおくんだけども、オネエサンはすぐにでも開けてみたくなっちゃった」

じいっ。

短く鋭い音でジッパーが閉まる。と同時に、空き地の真ん中の空中を縦に引き裂くように、長いジッパーが現れた。

じいいいいいいっ。

その長さに見合うだけの時間をかけて、金属の歯が開いていく。

空間に開いた等身大の裂け目から、這い出るように細身の人影が現れる。

「やあ、綺麗なオネエサン。俺と遊んでくれるの？」

長い灰色のコートを着込み、似非倫敦にとけ込んだその男の顔は、目深に被ったフードによつて半分が隠されている。唇の左端を歪める偏った笑みだけでも、それが悪意に満ちた存在であることがよく分かる。

「ああ、遊んでやるよ。猟奇で狂気で病気で陽気なダンスを踊ろうぜ？」

辺りにはもう誰も居ない。猫をかぶり続ける必要もな

いだろう。開閉魔は歪めていた口をOの字に開いてあつげにとられている。

「笑えない冗談だ……」

「ああ。そのまま二度と笑えねえようにしてやるよ」

スカートの手を沿わせると、内蔵された機械からくりによつて

ステレオタイプ

《固定観念》の柄が吸い付くように手の中に収まる。こ

の仕掛けだけじゃない。スカートには巧妙に深いスリットが隠され、足の動きを阻害しない。布地そのものも、防刃、断熱、絶縁仕様の優れもんだ。サルファの奴は芸術品だと言うが、使う方に見ればドレス型の兵器以外の何者でもない。オレは鞘を払わず、そのまま開閉魔に向かつて振るつた。開閉魔はとつさに左腕を盾にするが、この一撃は先ほどの戯れあいとは違う。奴のつま先が宙に浮き、そのまま吹き飛ばす。左腕が折れた感覚が無いのが不本意だ。これじゃあ背中への借りを返したとは言えないな。奴は真後ろに開いたジッパーから、執拗に左後方を攻めてきた。そして腰に差したナイフらしき武器の向きもまた、奴がまず確実に左利きであると示している。初撃で利き腕を無力化できるアドバンテージは大きいんだが。

二撃目。鞘の石突きを、倒れた開閉魔の喉に向かつて突き出す。奴が転がって避ければ風ぎ払う。防ぐのならへし折ってやる。しかし開閉魔はそのどちらでもなく、「下」へと躲した。じいっ。地面に裂け目が開いてい

る。着地点を失った鞘が裂け目へと吸い込まれると、開閉魔は素早くジッパを閉じた。「地面」に噛み付かれた鞘は、まるで根っこでも張っているかのようにびくともしない。動かない鞘を捨てて《固定観念》の刃を解き放つ。

さあ奴は次に何処から現れる？オレは全方位に向けて神経を研ぎすませた。

「おしやべりはナシかよ。オネエサンつれないねえ」空き地を囲む塀の上に、開閉魔は立っていた。左手には抜き身のナイフが鈍い光を放っている。

「お喋りしたいのか？…ならドウキを聞かせるよ」

「動機？オネエサンやっぱり刑事かなんかなの？」塀の上で開閉魔はふふん、と鼻を鳴らす。「それとも俺のフアンかな。いいよ、教えてあげる。どうして俺がこの遊びを始めたのか。あれは八年前の冬のこ…」

八年前の冬に何があったかは知らないが、開閉魔は崩落する塀と一緒に瓦礫の中へ落ちていった。煉瓦塀を蹴り抜くのは流石にキツかったか。軽く足首が痛む。

「め、滅茶苦茶だな、あんた」

流石に瓦礫に埋もれるほど雑魚じゃないか。立ち上がった開閉魔はコート^{コート}の土埃を払う。

「あんたが訊いたくせに」

「誰がお前の『動機』なんぞ訊きたいと言ったよ？お前^{マインド}の心^{マインド}に興味はねえ」土煙を切り裂いて突き出された

《固定観念》の切っ先を、開閉魔はナイフの腹で受ける。

「動悸を聴かせろって言ったんだ。お前の心^{ハート}が、恐怖でバクバク言ってるのをさ」

切っ先に加えていた圧力を一瞬緩めると、ナイフを支えていた開閉魔の力は宙に浮き、腕は緩む。引いた刀を返し武器を弾き飛ばしてやろうとするが、開閉魔は崩された体勢のままオレの一撃を受けるような愚かな真似はせず、素早く後ろに飛び退いた。戦闘においてリーチは重要だ。得物の長さこそこちらが勝っているが、一瞬で踏み込むその一步の大きさでは向こうに軍配が上がる。間合いを離すのは賢い選択だ。

「はは、凄いな。この遊びで『攻められた』のは初めてだ。ホントにあんた誰なの？教えてよ」

「悪いな。喧嘩しながらお喋りする少年マンガみたいな展開は嫌いなんだ」

「少年マンガ」なんて読んだこともないけどな。

開閉魔はフードの下の口をへの字に曲げ、細い顎に手を当てた。

「じゃあ、これならお喋りしてくれる？」開閉魔の左手から、ナイフが地に滑り落ちる。「質問タイムが終わるまで、ケンカはナシってことで。…：…わざわざ誘導にノったんだ。あんたにだって話題の殺人鬼にインタビューしたいことくらいあるでしょ？」

開閉魔が足下に落ちたナイフに手を伸ばすそぶりはな

い。奴がナイフを拾って体勢を整えるより、どうかんがえてもオレが一步半に満たない間合いを詰める方が早い。こいつ、馬鹿なのか。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十五。頭痛のせいで、突っ込むタイミングは逃した。だが、オレのカンが迂闊にしかけない方がいと告げている。奴の能力は応用が利く。まだ全てののパターンを見せたわけじゃないだろう。まあ、こいつのお喋りに付き合うのもまた一興か。その間にホスゲンやイペリットが追いつけば、戦況も変わる。オレは構えを解いた。

「何が訊きたい」

「なんども訊いてるだろ。あんた誰？」

「大体予想はついてんだろ」

「確証の無いことは言わないようにしてるんだ。『口は災いの門』って言うだろ？」

「生憎オレは『門』ってヤツにはからきし縁が無くてね。

なにせ盗賊だ」

「じゃあ表現を変えようか。口つてのはよく見える所についた社会の窺みたいなものだからさ。迂闊に開いちやだめなんだよ」

「オレは社会のはみ出しモンだからな。社会の窺なんて常にフルオープンじゃねえと窮屈でかなわん」

「はみ出すほどの大物にも見えなないけどね。大人しくチヤック、しときなよ」

「挟んで痛い目見てもしらないぜ」

「痛い目みるのはあんたの方さ」

「残念だったな。オレにはそもそも挟むモンが無い」

「探しても見つからないわけだ。まさか女だとは思いいしなかったよ」

「知ってる奴は知ってるけどな。単にお前の調査不足だ。……それで？オレは何だ」

「あんたは、《首領エイク》だ」

「そうとも、オレは頭痛だ。分かってんならバファリン寄越せよ、《開閉魔》」

開閉魔の手が動いた。箱状の何かが飛ぶが、殺気は無い。オレは片手でそれを受け取った。そして青い箱に記された文字を上げ上げと眺める。

「ふうん。いつもネタで言ってるんだが、まさか実物に目にかかれるとは思わなかったぜ」

「俺も同じ気分だよ。こんなに早くあんたが現れてくれるとは夢にも思わなかった」開閉魔はフードの下でにんまりと笑う。「おかげで危うく復讐相手に本気で惚れちゃうところだったよ。まあ、あんたも、惚れた女の子も、結局は殺すんだから結果は同じなんだけどさ」

復讐。そのコトバにオレは心底落胆する。つまり

《開閉魔》も今までオレの命を狙ってきた幾多の復讐者の、ちよつと趣向を変えたバリエーションに過ぎないつ

てことか。オレがこいつに何を期待していたのか、と尋ねられても答える由はないが。オレは渡された箱をそのへんに放り投げる。

「拾えよ。ナイフ。お前と喋るのには飽きた」

「俺の方では、まだまだあんたに訊きたいことがあるんだけどな」

「ああ、オレもお前とは腹割って話し合いたいぜ。ただし腹を割るのは、お前だけだ」

開閉魔が身を屈め、ナイフに手を触れる。オレは間合いを詰める。一步。その一步の間に、開閉魔はナイフを

振り上げた。もう半歩。踏み込みと共に《固定観念》を

ステレオタイプ

振り抜く。しかし、空を切るナイフの軌跡に沿って描かれた金属の齒列が、刃を受け止めた。金属同士が擦れる不快な音が神経を逆なです。頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十二と六。そういう防ぎ方もできるのか。ジッパーに峰をこすりながら、突く。開閉魔は身を退ける。更に斬り上げると、奴と空間ジッパーは十分に離れる。確実に斬撃を防ぐだけのジッパーを作るには、それなりに大振りしなければならぬ。ならこの先、そんな隙は一瞬たりとも与えてやらなければならない。連撃を加えて、奴をまだ崩れていない壁際へと追いつめていく。

と、ふいに目の前から開閉魔が消えた。足下には開いた裂け目。あらかじめジッパーを開けておいたのか……。じいっ。

離れたところに再び奴が現れる。オレは再び間合いを詰めようと地を蹴る。

開閉魔の右足が、地面に沈んだ。

オレはとっさに身を反らす。それでも奴のつま先が顎の先を僅かに捉える。がくん。脳が揺れ、口の中に僅かに鉄臭い味が広がる。芯で捉えられていけば脳震盪だ。危ねえ。ブレた視点を再び正面に定めると、開閉魔が消えている。厄介な能力だ。次は何処だ？と、空き地の端に気配を感じる。

じいっ。

聴こえた音はすぐ後ろ。マズい。背中をとられたらア

ウトだ。音だけを手がかりに、《固定観念》を振り抜く。

ステレオタイプ

奴がジッパーを開けようと手を伸ばしていたら切断。ナイフでも弾き飛ばすことができる。だが奴の選択はそれどころでもない。開閉魔はナイフの刃を《固定観念》に沿わせ、刀身にジッパーを刻んだ。そして勢いを殺された刃をもう一方の手で掴む。刀身を血が伝った。開閉魔はナイフを捨て、《固定観念》に刻まれた短いジッパーを素早く、開ける。

じっ。

そしてオレの愛刀は半ばから、折れた。ジッパー付き

の刃が、からんと軽い音を立てて落ちる。

「さあ、これであんたの武器は無くなったよ。それが有名な《固定観念》なんだよね？それが無くなっちゃえば

ステレオタイプ

あんななんてもう怖くない」

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十七。

オレは三分の一度に短くなってしまった刀をその辺に放り投げると、大げさに嘆息した。はあ。

「おい、イペリット」空き地の端から動かない気配に向かつて、振り向きもせず声かける。「オレの

ステレオタイプ

《固定観念》、よこせよ」

「合点了解ロボ」

すぐに後ろから黒い鞆付きの刀が投げてよこされ、オレはそれを片手でキャッチする。

「いいタイミングだったな。お前にしちや上出来だ」

鞆からすらりと細身の刀身を抜き、啞然とする開閉魔に向けて構える。

「…さっきのはニセモノ？」

「どっちがホンモノだったか、その身で切れ味を確かめてみるか？」

「…遠慮するよっ」じいっつ。

ジッパが開き、今度は奴の左手が宙に消える。オレの手元に現れたナイフの切っ先が、再び刀身にジッパを刻んだ。

「また折ってやればいいだけのハナシだ」

「そうかよ」

せせら笑う開閉魔のいけ好かない顔面めがけて、ステレオタイプ

《固定観念》を投げつける。回転する諸刃の長剣は、と

つさに躲す奴のフードを切り裂いて飛んでいった。

「次っ！」

投げ込まれたのは、安っぽい飾りのついた突剣だった。おいおい、もうちよつとマシな用意しとけよ。オレはぼやきながらも剣先を撓らせて、開閉に向けて突き出す。

「なんだよ！一体何本あるんだよ！だけど…」

突きを避け、前方に体重がかかったオレめがけて、開閉魔はつま先を蹴り上げる。起点の見えた蹴りなんて喰らうかよ。余裕で避けるが、刀を返すように振り下ろされた踵が、突剣を打ち砕いた。金属と金属がぶつかるような感覚。こいつ、靴に何か仕込んでやがる。

「すくなくともこいつは、ニセモノだ」

空中に手をかざすと、今度はやや大振りな革製の鞆がオレの手のひらに収まる。

「さて、ならホンモノはこれか？」

今までよりも重い斬撃を、開閉魔は受けるのではなく躲す。切れ込みの入っていたフードが、剣圧によつては

だける。初めてオレと開閉魔の視線が交錯した。血のように紅い左目。そして見覚えのある、翡翠色の右目。

「…っお前！」

動揺の隙を突かれた。再び剣が折られる。オレはすぐさま柄を捨てて、空になった拳を奴の顔面に叩き込んだ。

ナイフを受けた左腕にはまっすぐミミズ腫れのようなジッパが刻まれたが、この一撃は約束された一撃だ。まともに入った。開閉魔はがくりと膝をつく。オレは

後ろを向いてイペリットの方を伺った。イペリットの背中に、背伸びをして手を振るシエリもいる。お前の右目の仇はとりあえずとつたぜ。

「ホスゲンはどうした！」

大声で問いかける。

「途中でオカシラを見失ったから、二手に分かれたロボ。きつとそのうち追いつくロボ！」

「次のを寄越してくれ」

イペリットは胸のハッチを開けると、中からずるりと刀を取り出し、オレに向かつて放り投げた。受け止めた漆塗りの木鞘は細身だがずしりと重い。日本刀だ。

「ストックはそれで最後ロボ。高いからなるべく壊しちや駄目ロボ」

「努力する」

ぶち込まれたとき偉髭にとりあげられた百五十と二本のストックが無事だったなら、もうちよつと楽できたのかもしれないが。使わない剣をその鋭さを保って保管するには存外手間と金がかかる。おまけに似非倫敦塔は毎朝偽テムズ河から立ちのぼる霧、その湿気に曝される。全部を全部錆びさせちまつた奴を責めるのは可哀想つてもんだ。

きいん。

日本刀を抜く瞬間の澄んだ金属音は独特で、オレは今まで振るつてきた幾多の《固定観念》^{ステレオタイプ}の中でも、日本刀

が特に気に入っている。突いてよし、斬つてよし、殴つて良しの優等生だ。

立ち上がった開閉魔は、地面に血まじりの唾を吐く。

「ちえつ、《固定観念》を折つてやれば、あんただって弱体化すると思つたのにな。目論みがハズれたよ」

「何よりも硬いダイヤモンドを切るには、何を使うか知つてるか？」オレは尋ねる。「より研ぎすまされたダイヤモンドを使うんだ」

開閉魔は怪訝な顔で立っている。仕掛けてくる気配は無い。

「『愛刀』は一本しかない。一度武器を折られたら、闕えない。《固定観念》^{ステレオタイプ}つてのはそんなくぢらない、しかし強固な固定観念をぶつた斬るための刃だ」

同族殺しの剣は、刃の減りが激しい。オレがこれまでに使い潰した《固定観念》^{ステレオタイプ}の数は千とんで九本。そのなかにはたとえば大剣があつたし、槍があつたし、ノコギリもあつた。その全てにオレは同じ名前を付け、時にはワザと折られてやる。伝家の宝刀をへし折つたと高々となつた鼻つ面に、すぐさま次の《固定観念》^{ステレオタイプ}が突きつけられる。そうしてオレの敵が固定観念を両断される諧謔を愉しむために。

「思つた通り、最悪の性格してるな、《ヘッドエイク》。オレが八年間憎んで憎んで憎んで、頭ん中で百万回も一

億回も殺した殺人鬼と同じだよ」

「おいおい、惚れそうだって言ったのはどの口だ？」

「…やっぱり口は災いの門だ。閉じておけばよかった」

「閉じてたって窓ガラスぶち破って災いを投げ込んでやるよ」

「まったく、笑えないね」

と、開閉魔がオレの背後に目をとめ、ぴくり、と眉を上げた。オレは内心で舌打ちをする。こいつシエリに気づきやがった。開閉魔がシエリの目を盗んだ野郎と同一人物だという事実は、正直想定外だった。分かっていたらシエリが何と言おうと連れては来なかったのに。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十七と八。

「やあ、幸せな王子様じゃないか」開閉魔はシエリに向かって言った。「それとも、若いツバメの方かな？こんなところで会うなんて奇遇だな」

「ルイサイト…」シエリが珍しく深刻な声で呟く。ルイサイト？その名に聞き覚えがある。…どこで聞いたんだ？オレは記憶を辿る。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百三十七と九。

それは失踪したシエリの友達の名じゃないか。名前。紅い目。シエリの右目。復讐。そして目の前の開閉魔によく似た、一番目の男。記憶の中で全ては繋がった。

「右目、ありがとう。お陰で俺の仇がよお見えるよ」

「やめてよルイサイト。エイクと喧嘩しちゃう駄目…」

「何の権利があつて俺に命令しているの？俺はお前のせ

いでこうなったんだ。俺には憎しみや怒りが存在しないわけじゃなかった。人より少しだけ表現が下手だっただけなのに。それをお前が一人分まるまる俺に寄越すから。自分の中の要らない感情だけを俺に押し付けたから。俺

は他人の一・五倍怒ることになった。他人の一・五倍恨むことになった。この綻びた世界に暮らす他の誰よりも燃え盛る悪意が、俺の身を焦がし続ける。俺は押し付けられた者なんだよ。知ってるか？余計なものを押し付けられるのは、時として奪われることより不幸なんだ。俺から奪って不幸にした《ヘッドエイク》も、俺に押し付けて不幸にしたお前も、どっちも俺の仇だ。俺が犯した罪はお前のせいだ。俺に殺された奴らは俺のせいで死んだ。お前の大好きな《ヘッドエイク》だって……」

「その汚い口を今すぐ閉じる」

膿のようなそのコトバを、これ以上あいつに聴かせるな。

シエリは蹲って、ごめんなさい、ごめんなさい、と繰り返している。イペリットがシエリの前に立って開閉魔の視線からシエリを隠し、両手で耳を塞ぐ。しかしそれを見た開閉魔は、さらに声を張り上げた。

「ねえ知ってるかよ、シエリ！悪意しか無くても、人間は笑えるんだぜ。怒っても、怨んでも笑えるんだ。お前が悲しんでも、辛くても笑えるみたいにな。笑える、ハナシだろう？」

じいいいつ!

素早く張られたジツパーの盾が、オレの劍撃を防ぐ、が。刃を受け止めた金属の歯は大きく歪み、ぶつ、という音を立てて弾けとんだ。そのまま振り抜かれた切っ先が、開閉魔の肩口を浅く抉る。

「なるほど、そいつがホンモノってこと!」開閉魔は肩を押さえて退く。

「まだ理解してねえみたいだな。お前のジツパーが切れたのは、刀がホンモノだからじゃねえよ。オレが心底、頭にキてるからだ」心底、なのか頭、なのか。この怒りの主体がどこにあるのか分からない。なるほど親を殺されたお前には、オレを憎む権利があるだろう。だがお前にシエリを責める権利はねえよ。刃を向けるならオレだけに向ける。鋼の刃も、コトバの刃も。どちらもオレの影から生まれた刃だ。責任を持って、へし折ってやる。

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百四十。オレは地面に落としていた青い頭痛薬の箱を拾いあげ、中身を数錠、まとめて口に放り込む。

「…これより第二万五千七百四十と二回《オレ議会》を開催する。全オレの三分の二以上の出席をもって、この議会は成立する」

「おい、ひとりで何をぶつぶつ喋ってるの? お前気持ち悪いよ」

「これより多数決をとる。挙手。賛成一。反対零。よつて独断と偏見法第千百二十と九条【てめえは今すぐぶつ

壊す】の成立だ」

「は、はは。なに、それ。馬っ鹿じゃないの?」

「残念だったな。お前の敗北はたつたいま民、主的に決定されたぜ。ひとりつてのは、多数決には最適だ。まった奇数くもつて…過不足、無いっ!」

大きく斬り込む。劍先が銀色の弧を描き、風を切る。

開閉魔のジツパーも、か細いネックレスのように断ち切る。奴のナイフは連撃の前にもはや刃としての役割を失い、盾に徹していた。足下に開いた裂け目から逃げようとする後足を、オレはローキックで掬う。重心を崩された長身が、地に沈んだ。

「おかしい…。こんなおかしいって! 復讐するのは俺だよ? この遊びのホストは俺なのに。なのになんで…」

「なんでこんなに一方的なんだよっ!」

「答えはひとつ。お前が弱いからだ」

「畜生、あんたは死んだんだ! 死人のおくせに。百万回も、一億回も死んだんだぞ。お前がどんな能力を使って、どんな動きをしても殺せるようにオレはシミュレートしてきたんだ! それなのに! なんで! 能力を使いましなないあなたに俺が負けるんだよ。俺はあなたに勝つためだけにこの八年の全てを捧げてきたんだ。あなたを殺すためだけに、倫敦から戻って来たのに! 俺の刃はあなたに傷ひとつつけられない! だったら俺の八年は何だったんだよ? 俺は何のために生きてきたんだ? 殺されてくれよ

《ヘッドエイク》。俺はあんたのためにすべてを捨てたのに、あんただけがいつのまにか殺人鬼を辞めて、幸せになつてる。そんなの不公平だろ！」

「お前の意味なんてオレには正直どうでもいいが、ひとつだけ言っておく。シユミレトトじゃねえ。シミュレト、だ。コトバは正しく使えよ《開閉魔》」

「おおおおおおっ！」

飄々とした外面をかなぐり捨てて、開閉魔は絶叫する。ナイフで地を掻きむしるように切り裂き、ジツパーを開いて潜り込む。奴の背中を狙って振り下ろした刀は、僅かに届かない。

じいじいじいじい

思った通り、開閉魔はシエリの背後に現れた。マズいな。ヤケクソになつた人間は何をするか分からない。あいつらを先に逃がすべきだった。奴は逃げようとしてもしないシエリの首を羽交い締めになると、喉にナイフの切っ先を突きつけた。シエリじゃない。オレを脅すために。

「シエリを放すロボ！」イペリットが叫ぶ。

「黙れよでくの坊。殺す価値もない雑魚のくせに。《ヘッドエイク》もお前らのせいで捕まったらしいな。警察にパクられたお前らの身柄と引き換えに。お陰で余計な手間がかかったよ。今までの五十四人はお前らのせいで死んだようなもんだなあ？」

イペリットは無言で拳を振り上げた。

「…おっと、大人しくしないと俺たちのシエリが、今度こそ首ごと俺にとられることになつちゃうよ？」

空中で振える拳を、イペリットは口惜しそうに下ろす。悔しいだろうが耐えてくれ。オレがすぐになんとかする。

「武器をしまえよ《ヘッドエイク》」

奴は利き手のナイフをシエリの首筋に当てている。攻撃に出るとしたら、先ほどのようにジツパーを経由した足技でも使うしかない。肉弾対肉弾なら微塵も負ける要素は無い。オレは大人しく《固定観念》を鞘に納めた。ちやりいん、と、澄んだ鏗鳴りが響く。この音はオレのお気に入りだが、鏗鳴りは鏗が緩んでる証拠だ。後できちんと締めとかないとな。

「手を挙げてもらおうか」

開閉魔の右手には、銀色の銃が光っていた。…それがお前の切り札かよ。

「月並みな科白だな」毒づきながらも、オレは大人しく手を挙げる。

拳銃。こいつは厄介な武器だが、特性が分かかっていれば素手でも十分対処できる相手だ。銃口が見えていれば、一発目はどうとでも避けられる。問題は二発目だ。体勢を崩されていれば、瞬時には躲せない。だが二発目を撃つためには、奴は再び撃鉄を起こし、引き金を引かなければならない。ツーアクション。二瞬。二瞬あれば体勢を立て直し、反撃に転じるには十分だ。

「要求を聞こうか」

「分かつてんだろ？あんたに、死んで欲しいだけさ！」
引き金が押し込まれるのを目視すると同時に、地を蹴る。銃声。すぐ近くの空気が螺旋状に歪むのを肌で感じる。着地と同時に、体重を二度目の跳躍に向けて移動する。一瞬。今跳べば間にあ

ずどん。

「っが……！」

右肩を衝撃に貫かれた。跳躍と着弾によつて宙に浮いた身体が、もんどりうつて地面に叩き付けられる。嘘だろ？西部劇もどきの早撃ちガンマンだつて、むしろどんな人間も、あの一瞬にハンマーアクションと発射の両方をこなすことなんて不可能だ。人間業じゃねえ。

信じられない思いで顔を起こすと、オレを待ち受けていたのは真つ直ぐ向けられた拳銃だつた。

「オートマチック

「自動拳銃だよ？ふふ、こんなの知らないでしょ。じゃあね、《ヘッドエイク》。あんた強かつたよ」

「ルイサイト、やめてっ！」

この声はシェリか。……心配かけて悪い。

よう、銃口。目が合ったな。お前の熱視線は、火傷し
そうだけぞ。

ずどん。

おかしら

えいく

イペリットとシェリが叫ぶのが、スローモーションで聴こえる。

ああ。あたまんなかまつしろになつて……

……

……

……

頭痛が痛い。四百九十九万六千八百四十と一。

……これで死ねたら、オレは別に苦勞なんかしてないつての。

「痛つてえ……。滅茶苦茶痛えっ！」

元氣びんびんな声でオレは吼える。何だよ、この微妙な空気。引退コンサートで一度マイクを置いたのに、実はアンコールがあつてまた登場しましたみたいな中途半端さは。

額の生え際のあたりにめり込んだ銃弾を、指で引つ張つて外す。ちくしよー、痕が残つたらどうしてくれる？女の子の顔に傷をつけるなんて……責任とつてもららんだからね！なんて嘔吐感。嘔吐感。

「オカシラ、無事ロボ？」

「つたりめーだろ。てかお前は知つてんだから無駄に叫んでんじゃねーよ」

「エイク？エイク生きてる！ねえイペリット、エイク生きてるよー！」シエリは愕然とする開閉魔の手をすり抜ける。イペリットがそれを素早く抱きとめた。

「きやはは、エイク生きてるーううう。ひーん。良かったエイク生きてるよあはあは」

「シエリ、泣くか笑うかどつちかにしたらいいロボ」

「だって、だってボク、エイクが死んじやつたかと……うう」

「このオレが、お前を遺して死ぬか馬鹿」

オレはシエリの傍へ行き、頭を撫でてやる。イペリットが手を放すと、シエリは今度はオレに抱きついた。涙と鼻水でぐずぐずの顔を、オレに押し付ける。……まったくしようがねえな。

「良かったあ……えへへ」と笑いながら顔を上げるが、ふいに表情を曇らせる。「エイク、ホントに生きてるよね？ユレイじゃ。ないよね？」

指先で目尻の涙を掬ってやるが、それでも涙は次から次へと零れ落ちる。

「ほら、触ってみろよ。ちゃんと居るだろ。幽霊じゃない」

シエリの手を取つて、自分の頬にあてがう。シエリはぐすつ、と鼻を吸ると、頷いた。

「まあ、多少首がムチウチっぽいけどな」オレは首に手を当てて骨をこきこきと鳴らす。

「ねー、エイク」泣き止んだシエリが尋ねる。「なんでだろ、ボク、『泣けた』よ？ねえ、なんで？悲しくも、辛くもないのに。エイクが生きてて超嬉しいのに、涙出てるよー？どしてー？」

「そいつはうれし涙って言うんだよ。悲しくなくても、嬉しくても。人間は泣けるのさ」

「ありがとな。オレなんかのために泣いてくれて。うう。何、それ。知らない」

せつかくの一張羅の袖口で涙と鼻水を拭いながらシエリは言う。

そっか。知らないのか。うれし涙を。オレは猛烈に反省する。今まであいつを泣くほど喜ばせてやったことなんて、一度も無かった、ってことだよな。

「安心しな。これからは嫌ってほど泣かせてやるから」

「え、腕の中のシエリはびくりと肩を震わせた。ま、しようがねえか。日頃の行いが悪い。そう、悪いのは日頃の行いであつて、オレじゃない。」

「へッドエイク。うっ！」開閉魔が叫んだ。「俺を、無視してんじゃねーよ！」

ああ、こいつのことを完全に忘れてたな。別にいいだろ？お前の存在なんかよりシエリの涙の方が百六十と五倍重要だ。

銃が三連続で火を吹く。今避けたらシエリに当たるじやねえか。仕方ない。

オレは三発の銃弾を、全て左手の掌で受け止めた。

「いつてー！」

オレに銃は効かない。だからといって痛くないかといえど全くそんなことはなく、多分常人の三分の二くらいは痛いだろう。だからなるべく避けるようにしてるんだが。空中で痛む掌をぶんぶんと振ると、銃弾が三発ばらばらと落ちる。

「な、何なんだよあんた。バケモノか……」

「バケモノとは随分失礼だな。殺人鬼時代にだつてせめて『人間か？』って人間寄りの疑問形で訊いてもらえただつてのに」

そもそもバケモノつてのは死んでからなるもんだ。人をバケモノ呼ばわりしたければ、せめて殺してから言うことだな。

じいじいじい。

ジッパの開く音がして、ナイフを持った開閉魔の腕が現れる。逆手に握られたそれは、明らかにジッパを刻むための構えではない。一手で刺し殺すための構えだ。オレは両腕を広げ、その一撃を甘んじて受ける。

きいっ。

金属が金属を引つ掻く独特の音がして、刃は鎖骨の上を滑る。異様な手応えに怯んだ指先からナイフをもぎ取り、そのまま握りつぶす。零点の答案用紙のように丸めたナイフを、オレは奴の足下に放り投げてやった。パフオーマンスが過ぎるが、こうでもしてやらなきゃ奴は自分の負けを認めないだろう。

空間の裂け目が閉じ、青ざめた顔の開閉魔の元へ、武器を失った腕が戻つて来る。

「お前の負けだ開閉魔。お前は間違いを犯した。そしてその間違いはひとつじゃない」

オレは憎しみに燃える開閉魔の目を正面から見据え、言う。

「間違いその一。お前はオレが能力を使つていないと言つていたが、不正解だ。オレの能力もお前の銃と同じだよ。オトマチック全自動なんだ」

寝ても覚めても、この世に生まれ落ちたその瞬間から、オレの能力は発動しつづけている。ちよつと考えれば分かんたろ？か弱き乙女（嘔吐感）がパンチ一発で大の男を吹っ飛ばしたり、厚い煉瓦塀を蹴壊せるはずがない。

「間違ひその二。お前はシエリのことを『幸せの王子様』なんて呼んでたが、不正解だ。なぜなら『幸せの王子様』はオレだから。開閉魔、お前は知つているか？全てを失つた幸せの王子様に、最後に残されたものが何か。……『鉛の心臓』、だよ。オレの心臓は鉛でできているのさ」

そして鉛の心臓に連なる全ての血管も。動脈、静脈、人体の至る所に張り巡らされた血管網の全てが、柔軟で強靱な金属でできている。それはいかなれば、体中に金属のワイヤーが入っているようなものだ。当然刃の類いは通らないし、複雑に絡み合った毛細血管の網は、銃弾さえ軽々と受け止める。補強された骨格は、ちよつとやそつとの衝撃じゃヒビも入らない。

百二十と八番目は、オレに人間の心ハートはあるのかと訊いた。答へは単純明快だ。オレは少なくとも、人間の心臓ハートを持つたことなんざない。

百二十と八人も殺したんだぞ？ 死刑にならないわけがあるか。当然オレも死刑に処せられた。それも二度。二度処刑された犯罪者なんて、この似非世界広しといえどもこのオレだけだろう。一度目は絞首刑だった。当然のように、ローブなんかじゃオレは殺せない。半日天井に首だけでぶら下がって、足が痺れたからそろそろ下ろしてくれ、と言ってやったときの刑事の顔は見ものだった。二度目の処刑は銃殺刑。あれは流石に痛かったが、二百八十と六発の銃弾をその身に受け、それでも気を失いすらしめないオレを見て、ついに刑事の方が卒倒した。怖いもの見たさで処刑を見学に来た女王陛下もさぞかし肝を潰したことだろう。

そして残念なことに、この国には法で定められた処刑の仕方が二種類しかない。それ以外の方法で人を殺そう

と思えば、犯罪者になるしかないな。かくしてオレは、恐れ多くも女王陛下下の恩寵ベネリを受け、終身刑となつたのであつたし、ってハナシだ。奴らは気づかなかつたのだからか。誰よりも、自分が生きるこの世界を憎んでいるオレだ、これまでの人生で、自分を殺そうと試みたことが一度もなかつたのか、と。殺人鬼ブローにさえできないことが、奴らしろうとにできてたまるか。

この能力の利点はその規格外の防御力だけじゃない。神経と肉体が情報をやり取りする手段は、電気だ。神経サイボーつてのはそこそこ優れた伝達の媒体だが、電気の伝導速度とロスロスの少なさでは金属の導線に大きく劣る。そしてその金属の導線が、神経のすぐ傍を通つてるんだ。これを利用しない手はない。脳が発した電気信号は金属のハイウェイを通つてすぐさま筋肉へ伝達され、常人には不可能な反射速度を与えてくれる。普通の人間は、どうやら引き金を引くのを目視してから銃弾を避けるなんて器用な真似はできないらしい。人間つて不便なんだな。もちろん、この能力にもデメリットはある。血管が全部金属でできてるんだ。認めたくないが、オレは体格の割にかなり重い。生まれたばかりのオレを取り上げた産婆は、産声を上げた瞬間オレの身体が二倍ほどに重くなる瞬間を感じたという。可哀想にその婆さんはその時からぎっくり腰を患つた。

そして長年オレを苦しめてきたこの頭痛。全ての憎しみの元凶も、この能力に起因する。オレだって馬鹿じゃない。この頭痛の原因を探るため、医者にかかったことぐらいあるさ。頭痛こそ治らなかつたが、そこで知つたオレの身体の構造についての知識は、能力を使いこなす上で実に有意義だつた。：脳は柔らかい。そして大食いだ。脳みその有り余る食欲を満たすため、頭蓋の中には縦横無尽に太い血管が走っている。そしてその血管を支えるのは、脳みそ自身だ。オレの場合、血管そのものの重量が常人の比ではない。それを支える脳みそは重力によつて常に圧迫され、悲鳴を上げる。これが頭痛の正体だ。オレは頭蓋に巢食う頭痛の姿を、なんとなく「ウニ」と形容してきたが、それは頭蓋いっぱいに広がるわけと血管網のことだったのかもしれない。医師曰く、人間は継続する痛みに対して、感覚を鈍麻させる防衛本能が備わっているらしい。にもかかわらず、オレの頭痛が一向に消える様子を見せないのは、精神的な何かに起因するとか。精神論か。気合いで治る、つて考え方は、嫌いじゃない。

そう言えば、さつきからあまり頭痛が痛くない。どうやら開閉魔に貰つた頭痛薬が効いてきたらしい。最後の最後でオレの役に立つたな、開閉魔。

さあ、そろそろ奴にとどめを差してやろう。

「間違ひその三。お前程度がオレに喧嘩を売つたことそのものが、不正解だ《開閉魔》」

オレは言い放つて開閉魔にびしりと人差し指を突きつける。我ながらキマつたぜ。なんて自己陶醉に浸つていると、シエリがオレの腕を押しつけて飛び出した。

「あつ、おい！待てよシエリ」

オレは静止するが、シエリはまったく聴こえていないかのように開閉魔に向かつてずんずんと進んで行く。

「ああ、シエリ。俺の可愛いおとうと。お前なら分かつてくれるよね？俺の痛みが。俺の苦しみが」開閉魔は喜色を浮かべシエリに向かつて両腕を広げた。「そうだよ。悪いのはみんなこいつなんだ。この《ヘッドエイク》なんだよ。こいつが俺とお前から全部奪つたんだ。ふたりでこの《ヘッドエイク》を殺そうぜ。俺とお前ならできるさ。そうだ、お前が俺に寿命を半分くれればいい。今は無理でも、次回ならきつと勝てる。その次でもいい。俺が長く生きていれば、それだけチャンスは増えるんだから。なあ、いいだろ？お前は俺の物だ。俺に与えるための存在だろ？だからジッパも付けてやつたんだ。自分の物に名前を書くのと一緒さ。おいでよ、俺のシエリ坊」

「間違ひその四」明るいが、果てしなく冷たい声でシエリはオレの科白の後を継いだ。開閉魔の表情が凍り付く。

「お前は多くの人を傷つけた。そして殺した」

「な、なんだよシエリ。『おまえ』だなんて。昔は『ルイ兄い』って呼んでくれたじゃないか。小さい頃は俺が居なきやなにもできないチビ助だつたくせに：昔みたいに

仲良くやろうぜ、なあ？シエリ。ヘッドエイクだつて殺しただろ？俺よりもつとっぱい殺したじゃないか。なんであいつは良くて、俺は駄目なの？そ、そうだよ。俺はあいつの真似をしただけなんだ。俺は悪くない」

「間違ひその五。おまえはボクの大切なものを傷つけた。ホスゲンも、イペリットも、そしてエイクも」

この世には恐ろしいものが沢山ある。たとえぼそれは武装した警官隊だつたり、アイデンティティの崩壊だつたり、死そのものだつたりするが、その中のどれよりも、オレにはシエリが恐ろしい。それは初めて出会つた時から、今でも変わらない。

「でも安心して。ボク、怒つてないよ。うん。ぜんぜん怒つてない」未だかつて見せたことのない、恐ろしい笑みを浮かべてシエリは開閉魔に近づいていく。開閉魔は一步、二歩と後ずさりする。

「ボクにそんな感情、無いからねっ！」
そしてシエリは、開閉魔の顔面に渾身のグーを、叩き付けた。

骨が碎ける鈍い音がして、開閉魔は鼻血を吹き出しながら、後ろ向きにぼたりと倒れた。

「間違ひ：その六。ボクはおまえなんか、分け与えるべきじゃなかった」

そしてくるりと踵を返し、こちらに向かつて、にっ、と微笑む。ああ、ちくしよう。オレなんかよりシエリのがよっぽどキマつてるじゃねえか。

「エイカーっ！ボクやつたよ！」シエリは嬉々として駆け寄ってくる。そして最後の一步をジャンプでオレに飛びついてきた。オレは空中のシエリを抱きとめる。

「ねえ、エイク。見た見た？ボク怒れたよ！ルイサイトを殴つてやつたんだ！」

「ああ、見てた。最高にカッコ良かったぜ、シエリ。妬いちまうくらいにな」

「えへへー、どうせなら惚れちやつてもいいんだよ」
開閉魔みたいな物言いしやがつて。なんでも学習すればいいつもんじゃないよ。

「生意気な。百年早いぜ」オレはシエリのおでこを人差し指でぴん、と弾く。シエリは目を瞑つてきやはは、と笑つた。

「百年経つたらエイクはすんごいおばあちゃんだよ？そんなときになつて、『百年遅い』なんて言わないでよねー」
「言うじゃねーか。だつたら九十と五歩譲つて『五年早い』にしてやつてもいいぜ？」

「ふふ、いきなりそんなに割引しちやつていいの？」
「だつてそれ以上待つたらオカシラもそろそろ三十路が見えてくるロボ」

オレは黙つて鞆がついたままの《固定観念》を振つた。すつ飛んだ鞆がイペリットの頭を弾き跳ばす。
がろん。

イペリットは転がる頭を追い、シエリは笑い転げた。その笑い声がだんだん萎んでいくのを感じて、オレはシエリの顔を伺う。シエリはオレの瞳を真つ直ぐに見つめ返して、訊いた。

「ねえ、エイク。エイクはボクのこと愛してる？」

「ああ、愛してるぜ。この世の誰よりも」

言ってから気づく。シエリが何度も言ってくれたこのコトバを、オレはたったの一度だつて、シエリに言つてやったことがない。まったく、とことん駄目な奴だな、オレは。

「それは…心からのコトバ…？」シエリはへにやりと微笑んで問うた。

「ああ。なんならこの心臓ハートに訊いたつていい」お前がそれで安心できるのならは。

シエリは首を横に振る。

「ねえ、エイク。ボクは、ルイ兄いが、大好きだつたんだ」シエリはぼつり、ぼつりと言う。「隣に住んで、ボクよりなんでも上手にできて。足が速くて、絵も上手だつたんだ。ボクはいつもルイ兄いと一緒に居たんだよ」

「…ああ、分かるよ」

「ホントに、ホントに大好きだつたのに。ねえ、なんで？ どうしてルイ兄いは変わっちゃったのかな」

「オレのせいだ。…ごめん」

「謝らないで。そんなのエイクじゃないよ。エイクまで

ボクの知らない人になつちやったら、ボク、嫌だよ…」
ごめん。心の中で何度も呟く。シエリのこの不安に、どうしたら応えてやれるだろう。それを知るには、オレはあまりにも穢れ過ぎている。

「エイクは、エイクだけは、変わらないでね。ずっとボクの大好きなエイクでいてよ」

再びシエリの頬を伝つた涙に手を伸ばそうとした時だった。目の前のシエリが、がくん、と地に沈んだ。地面に開いたジッパーから開閉魔の両腕が伸び、シエリの足を裂け目に引きずり込む。開閉魔はシエリを引く反動でジッパーの外へと飛び出し、シエリを裂け目の奥へと押し込んだ。

じいじい。

開閉魔が閉じきつてしまう前に、オレはかろうじてジッパーの端に手を差し込んだ。

がち、

オレの右手を固定して、ジッパーは止まる。ほつとしたのもつかの間、つま先で腹を蹴られ、オレは地面に這いつくばる。右腕が捻れるのに耐え、なんとか仰向けになつたところで、開閉魔に押さえつけられた。

「シエリを何処へやった！」

「そんなこと訊いてる余裕があるの？」鼻血を垂らしながら、開閉魔はせせら笑う。「シエリは向こうに落ちたんだよ。鋼鉄も、空間も、なんだつて開けられる俺のジッパーだ。世界くらい開けられるさ」

「向こう？」

「このジツパーの向こうには、ホンモノの世界がある。綻びていない、完璧な世界が。俺は勝手に『倫敦』と呼んでるけどね。これも、向こうで手に入れたんだ」開閉魔はそう言つて自分の銃を指す。綻びていない世界。ホンモノの倫敦。このジツパーの先にそれがあるのか。開閉魔がそこを通過して移動していたのだ。落ちたからといって、シェリが今すぐどうにかなつてしまうことはないだろう。今すぐここをこじ開けて追えば、連れ戻すことはできるはずだ。

「八年前、家を飛び出したその夜に、俺の能力は目覚めた。使い方もよく分からないまま、俺は『倫敦』に落ちたんだ。向こうじゃ能力は使えない。おかげでこの世界にもどつてくるまで六年もかかった。『倫敦』だけじゃない。移動し続ける裂け目を探して、いろんな所を彷徨つたよ。あちらは素晴らしい世界だ。老人は当然のように百まで生き、人類はすでに月に到達している。俺たちがまだ手に入れていないありとあらゆる幸福を、向こうの人間は既に手に入れている。でも俺は戻つて来た。あんたを殺してやりたい一心で、俺は帰つて来たんだ」

あはははは、と開閉魔は高笑いする。

「シェリ坊はきつと戻つてこれないだろうね。戻つてこないだろうね。あいつにはここへ戻つて来る手段も、理由もない。向こうにいれば、あいつは奪われたいんですむんだからさ！…そのジツパーを開けて追いかけたつて

無駄だよ。倫敦と、似非倫敦の時間は違うんだ。同じジツパーを潜つても、同じ倫敦の、同じ時に行けるとは限らない。あ、そつか。そんな話、するだけ無駄だったね。あんたはここで死ぬんだから」

袖に隠したナイフを掌に滑り込ませ、オレの喉に向かつて、振るう。首を一文字に横断するジツパーが刻まれた。

「これでチェックメイト、だ」オレの上に跨がつて、開閉魔が言う。…つたく、こいつは言うことがいぢいぢ月並みで腹が立つ。

「ああ、その通りだ」オレはちらりと開閉魔の背後に目をやると、だらりと肩の力を抜いて抵抗をやめた。これは流石に、勝負あり、だな。溜め息が漏れる。こんな結末は、初めてだ。だが、悪くはない。独断と偏見法第九百三十五と五【終わりよければ、全て良し】。

「ばいばい、《ヘッドエイク》」

開閉魔はオレの首に手を伸ばし、そして、

…そのまま倒れ込んだ。力の抜けた奴の身体が、オレにずしりとしかかる。

銃の形を真似た人差し指の先を、ホスゲンは、ふつ、と吹いた。

「…遅えよ」

「でもタイムリングは、完璧でしょう？」

「まあな、それは認めてやる」
ホスゲンはにしし、と笑った。

雲の切れ間から、月明かりが差し込んでくる。光には質量も感触もないはずなのに、疲れきった身体に染み込むように透き通っている。似非倫敦の狂ったな月は、両側から欠ける。地球の影はひとつしか無いのに。似非倫敦塔を出てから、目を開けている時間はずっと動きっぱなしで、ゆっくり夜空を眺めるヒマなんてなかったかな。長くてくだらない闘いは、終わった。《開閉魔》はオレの影。影を打ち破るのはオレ自身しかないと思っただが、結局最後は全部、こいつらに持つてかれちまった。ああ、そういえばオレの《ヘッドエイク》を殺したのも、こいつらだったな。なら、当然か。

オレは《開閉魔》に何を期待していたんだろう。オレとそっくりな誰かを見つけて、自分を肯定してもらいたい。そんな、殺人鬼時代みたいな妄想を、オレは未だに持ちつづけていたんだろうか。それとも自分の合わせ鏡をぶち壊すことで、殺人鬼のオレを亡き者にしようと考えていたのだろうか。事が終わった今となつては、もう分からない。分かっているのは、どちらも為されなかつた、つてことだけだ。あれほど狩りたかつた奴の動かない身体を見ても、ただただ、気怠い。

オレは「改心」なんて信じない。ぶん殴る前も、ぶん

殴つた後も、《開閉魔》は依然としてこいつだ。シエリに出会う前のオレも、出会った後も、オレが頭痛ヘッドエイクであるという本質は全く変わらない。その事実からは、逃れようがない。悪党がひとつの善行を為そうと、悪党が善人に変身したりなどしない。それが二つの善行でも同じだ。三つでも、四つでも。五つでも。従つて帰納的に、悪人はどれだけの善行を積み重ねても善人に変わることはない。「罪滅ぼし」などという都合のいい逃げ道は、存在しない。そもそも誰かを殺した、この世から消滅させた時点で、奪われたとうの本人に赦しを乞う機会は永遠に失われている。その前提の下に為される「善行」とは、当事者でない誰かから好意を、或いは赦しを奪い取るうとする略奪行為に他ならないのだ。

オレは善人になろうとは思わない。悪人のまま、悪党のままでもいい。でも、人間は弱いからな。誰からも赦さずに生きて行くことなんてできないんだ。たとえば世界に住む全ての人間から、「あなたは存在しません」と言われることを想像してみればいい。我思う故に我あり、なんて格言馬鹿馬鹿しくなるぜ。たつたひとり。たつたひとりでもいい。オレがどんな人間でも、たとえ人間じゃなくても、そこにいていいよ、お前はそこにいるよ、確かに存在するよ、と言ってくれる誰かがいれば。オレにとつて、それはシエリなんだ。

オレは眠りこける開閉魔の身体を押しつけて、身体を

起こした。そして右手に噛み付いたジツパーを、無理矢理こじ開ける。オレの能力では無いからだろう。開閉魔と同じように簡単にジツパーを動かすことはできなかった。右手が外れると、今度は隙間に《固定観念》をねじ込んで、テコを使う。裂け目はゆっくりと開いていった。「よし、これでなんとか入れそうだな」

「これ、何ですかい？」

「この向こうにホンモノの『倫敦』があるんだと。シェリが向こうに落ちこちた」
ホスゲンは眉をつり上げる。

「それで、シェリは無事なんですかい？」

「無事じゃなかったらぶん殴ってやる。独断と偏見法第六百四十と六条【遠足は、家に帰るまでが遠足です】。全員揃って帰れないなんて、せんせーは認ないからな」
「お頭が先生じゃ、生徒はみんなグレちゃいますぜ」

「当然だろうな。全員在学中から盗賊ドロボウやってんだから」

「おまけに深夜の乱闘騒ぎロボ」
「この不良め」

オレは喉の奥でくくくつ、と笑う。

「お頭、当然おいらたちも連れてつてくれますよね？」

「馬鹿言つてんじやねえよ。帰つてこられないかも知れねえんだぞ。それに全員で行つちまったら、誰がこの穴を閉じられないように守る？」

「でも、そもそもにしてオカシラがいなくなつたらイペ

リットたちは似非倫敦市警に捕まるロボ。どうせオカシラが帰ってくるまで似非倫敦塔に隔離ロボ」

あ、そうか。その事をすっかり忘れてたぜ。

「オレが帰らなかつたら、偉髭のやつ、怒るだろうな」

「怒らしとけばいいロボ。どうせ《開閉魔》も引き渡せないロボ」

オレは地面にのさばつた開閉魔を見下ろした。

こいつをここに残して行けば、目が覚めたこいつはジツパーを閉じるだろう。そうなれば、倫敦と似非倫敦を繋ぐ通路は消滅する。帰ってくる望みは絶たれるかもしれない。ホスゲンとイベリットがいれば、ジツパーを閉じるのをやめさせることができるだろうか。無理だな。

「じゃあ、こうすればいいな」

オレはぐーすか寝こける開閉魔を、穴の中に蹴落とした。遠近感が破綻した闇の中で、奴の灰色のコートはあつという間に小さくなり、やがて見えなくなつた。

「全員で行けば、問題ナシだ。奴は向こうでゆっくり調教してやればいいさ」

「相変わらずの力技ですねい」

「向こうに行つたら、それも半減だろうがな」

綻びていない世界。ホンモノの倫敦。そこには神が置き忘れた能力なんてものは存在しなくて、能力なんかがあるせいで不幸になるオレやシェリや開閉魔みたいな奴らもない。全ては正しい物理法則と常識良識方程式に

従つて運行し、整然とした日常が繰り返すのだから。
オレが頭痛に悩まされず、シエリが失わずに済む世界。
もしかしたら、オレたちが暮らすべきなのはここではない、
ホンモノの倫敦なのかもしれない。

だが、ひとつの事実がオレを不安にさせる。開閉魔が
持っていたあの銃。銀色の自動拳銃。人殺しのための機
械。ホンモノの倫敦に狂気がないのだとしたら、あの凶
器はなんだ？どうしてあの銃は、あんなに進化してい
る？兵器だつて他の道具となんら違いはない。数万、数
億の人々の手を経て、数万回、数億回使われる事によつ
て進化していく。つまりホンモノの倫敦の住人は、それ
だけ銃を、人殺しの道具を、使い込んでいるのだ。

この似非世界で戦争が起こるのは、世界が綻びている
からだ。言語の壁を境にしてコトバは勝手に歪曲し、ひ
とつの事実が国境の此岸と彼岸でまったく異なった現象
にもなりうる。友好の手紙はいつの間にか宣戦布告にす
り替わり、争う両国が休戦を叫んでも、その声は決して
前線に届かない。

それは世界の綻びが、オレたちの意思の疎通を邪魔し
ているからだ。綻びは、悪意を生む。それはオレが身を
以て知っている事実だ。世界そのものが理不尽だから、
オレたちの怒りは、憎しみは、たとえ無からでも生まれ
続ける。

だがもしも、もしも綻びのない世界で同じ事が起こる

のだとしたら。そこには綻びに拠らない悪意が存在して
いるのだ。そして綻びに拠らない悪意とは、人間の悪意
に、他ならない。

怒りを、憎しみを、殺人衝動を、世界が与える悪意へ
の復讐だ自分は悪意を反射しているに過ぎない、と自己
弁護するよりは。悪意は自らの内から生じ、あくまでも
能動的な動作であると認める方が、よほど合理的で破綻
が無い。しかし、能動によつてこの世界以上の悪意を生
じさせ得るのだとしたら、オレのような存在は全く特別
ではなくなる。周りのもの全てを敵と見なす理不尽な悪
意は、どんな個人の内側にも能動的に生じ得るのだ。世
界の偏りによる悪意は、偏りの一端に流れ落ちる。それ
はたとえば《開閉魔》であり、《ヘッドエイク》だ。だが
偏りの無い世界の、どこからでも生まれ得る悪意は、平
均する。百二十と八人の人間をひとりひとり心臓を取り
出して殺すような、圧倒的悪意は生まれなくてもいい。
だが、数億数十億の人間が、たとえ僅かでもそれぞれに
悪意を育むとしたら、その世界が溜め込む悪意の総
量は、この比ではないだろう。

そんな場所に、シエリをひとりぼっちにするわけには
いかない。それはもちろんその通りだが、正直なところ
それは建前だ。

「善行」は、存在しない。だからオレがシエリを探し
に、帰るあてもない場所へ行くのも、あいつのためなん

かじやない。あいつを助けたいから、なんて綺麗な理由じゃない。オレはただ単に、あいつが必要だから、あいつの居ない世界で生きて行くことなんて考えられないから。他の誰でもない、オレ自身のために、この世界を捨てるのだ。独断と、偏見に従つて。

「おかしなもんだ」

「何がですかい？」

「あんなに大嫌いだつた世界なのに、いざ別れるとなつたら寂しくてたまらない」

似非フリート街のゴロツキども、サルファ、看守のやつに、エリー嬢。ついでに偉髭も入れてやつてもいいか。独断と偏見法に従えば、「廃すべき」隣人たち。殺したいほど憎んでいたはずなのにな。どうしてだろうな、永遠ではないかもしれないお別れが、こんなにも哀しい。

「そりやそうでさあ。世界はおいらたちにとつて、血のつながつたきょうだいみたいなものなんですからね」

「きょうだい、か」

オレと世界の憎みあいはもしかすると、似た者同士の同族嫌悪だつたのかもしれない。

だとしたら、ケンカ別れなんて良くないよな。オレは歪な月に向かつて手を伸ばし、月光と握手を交わす。幾多の血にまみれたはずの右手も、月光の下にはどこまでも白く、穢れなく見える。

「あばよ、似非倫敦。オレはお前が大嫌いだ。帰つて来たら、またケンカしようぜ」

返事は、無い。存在しないコトバの真偽を、心臓ハートに問うことはできない。だからこそ沈黙は、いつだって完璧に真理だ。

嘘まことは真実まことに真実は嘘に。次元の狭間で全ては裏返し、裏返し。

そしてオレたちは、

げんじつきょうと現実きょうの境界を、越えた。

頭痛が痛い…さて、今は幾つだったか。